

柳田国男の話

作家 室井光広

第二回 極私的民俗学入門



1

柳田国男が最晩年に生涯の蓄積を傾けて書いた『海上の道』の岩波文庫版が、先年、文字が大きくなって改版されたのを機に、学生にもどったつもりで、ていねいにノートをとりながら読み直してみた。同書の原本が刊行されたのが一九六二年（昭和三十六年）、柳田が八十七歳の時である。現在五十代半ばの当方などが二十代半ば以降三十年余にわたって恥ずかしい部分読みをあきることなく繰り返してきた『定本柳田国男

集』（全三十一巻・別巻五）の出版を柳田自身が決めたのもこの年だ。

柳田民俗学に寄り添うにあたり、まずもって極私的 な事情をめぐる弁明をしなければならぬと考えているので、柳田のいう「国民俗学ならぬ」「個人民俗学」ふうの個人的な記述も許していただきたいのだけれど、一九五五年（昭和三十〇年）生まれの当方が東北南部奥会津で同級生が十名の山深い分校に入学した一九六二年、つまり柳田民俗学の集大成といわれる『海上の道』刊行の翌年——先の定本版の配本がはじまった年の八月八日、柳田は、末広がりの数がめでたくも重なる米寿

の八十八歳で死去する。

山村で農林業に従事する家族の姿をみて育った私にとって柳田学は根源的になつかしい存在である。「人間は水路をたどって案外な人野まで伐り開いて住んでいることに驚いたが、しかし山の力がこれによって少しも弱められたり衰えたりしていないのには更に驚いた。平地に住む者の想像を超越した寂漠たる生存、これにともなう強烈な山の情緒が、人間の心を衝つてやまない」（『山姥奇聞』）というような柳田の文章をはじめからよく理解できたわけではないけれど、他ならぬ自分自身の原風景にまつわることが比類のない文体で描かれているという驚きは、凡庸な学生の心身を衝つてやまなかった。

正直に告白しておくが、柳田の膨大な著作のうち、学生のころ曲がりなりにも一読しえたのは岩波文庫二冊、前記『海上の道』（一九七八年初版）と『遠野物語・山の人生』（一九七六年初版）くらいであり、しかも、

●むろい・みつひろ 一九五五年福島県茨会津生まれ。早稲田大学政治経済学部中退、慶應義塾大学文学部新語学科卒業。東海大学文学部文芸創作学科准教授。著書に小説「おどるでく」（芥川賞）、「そして考」など、文芸評論に『零の力』（群像新人文学賞）、「キルケゴールとアンデルセン」「ブルースト追憶」などがある。

はじめは両書とも、巻末解説（前者は大江健三郎、後者は桑原武夫）のみを読んでやりすごしていた。

この二つの解説の共通点をさがすとすれば、ともに文学の視座に立つアプローチであるというところだろう。大江と比較すると後者の桑原武夫の業績について私は何も知らなかったが、文学に対して人並みの興味関心を抱いていた学生として、「日本民俗学の門出をしるす美しい記念碑といふべき『遠野物語』と、その直接的展開である『山の人生』の岩波文庫版のための解説を書くという名誉が、なぜ門外の私にあたえられたのであろうか」と書き出される、その「門外」という言葉のひびきに、まずはひかれたのだった。

柳田の「極度に鋭敏な感覚性」についてふれたくだりで、桑原武夫は、「母親が毎朝めしたきかまごの下に燃した柴のにおいを数十年後に思い出したことから日本文化の昔をたどるといった話は、マドレーヌ菓子 の味から失われた時を求めたブルーストを思わせるものである」と書いていた。その時点で私はブルーストの大作を読んでいなかったのだけれど、この指摘は長く印象に残ったのである。

私は、M・ブルーストのいう、絶えざる錯誤の連続